日本風工学会賞（功績賞）を受賞して

河井宏允*

Hiromasa KAWAI

日本風工学会功績賞、本当にありがとうございました。私を推薦していただいた奥田様をはじめ、私を選考していただいた表彰委員会および理事会の皆様へ心より感謝しています。私が今日まで、風工学の分野で研究者としてまがりなりにも研究を続けてこられたのは、ひとえに風工学会の会員の皆様をはじめ、私の研究活動を支えてくれた多くの友人達や学生達のお蔭であります。特に、若輩ものの私が、藤野先生の後、法人化直後の学会の運営を会長としてそれなりにやり遂げることが出来たのは、藤野先生や田村先生をはじめ当時の風工学会の理事会、委員会の皆様のご協力のお蔭と心より感謝しています。

私が風の研究に関心を持ったのは、全共闘運動が京都大学に波及し、私が学んでいた工学部でも、1968年から史上初の無期限ストライキに入った頃でした。授業がないという恵まれた環境の中、友達とともに様々な研究室に顔を出すやら、先生を招いて自主ゼミを行うなどして、これからの進路について真剣に考える今にして思えば夢のような日々を送っていました。しかし、今思えばそうとしても、私が耐風構造研究室に決めた理由ははっきりとは分かりません。多分、私の友達の小島君が耐震（小堀研究室）を選び、当時からエースと目されていた上谷君が力学（横尾・中村研究室）を選んだことによるような気がします。良く言えば、彼らとは違う分野で羽ばたきたかった、裏を返せば彼らにはかなわないと思っていたのだらうと思います。

それから40年、私は風工学の分野で様々なことをすることになりました。修士課程を修了して直ぐの防災研究所での5年間の助手生活。ハワイで開催された高層建築物の会議でロシュコ先生から質問された驚き、日米セミナーで、ダベンポート先生やサーマック先生と出会い、東大寺の上屋の風洞実験について説明した時の緊張。あつと言う間の5年間で過ぎ、東京電機大学に移り、理工学部の立ち上げに携わった23年間。私立大学と国立大学との文化の違いに戸惑うとともに、学生達とともに新しい学部を作りあげていった苦勞と喜び。2000年に

再び京都大学防災研究所に戻り、退職までの11年間、伝統に戸惑いながら、新しい環境のもと研究を進めたことなどなど。あつと言う間の40年だったような気がします。

風工学会には、その前身の風工学研究会発足の時に、石崎先生から命じられ、東京大学の伊藤先生、加藤先生、日本大学の亀井先生、京都大学の白石先生にお集まりいただきたい旨の葉書を差し上げて以来の長い付き合いとなりました。その間、中村先生の元で表彰委員会の幹事をさせていただき、伊藤先生のもとで運営委員会の幹事をさせていただきました。両先生のお人柄に触れられるとともに、その後も親しくさせていただけたことは何よりの喜びでした。

前述したように、私が会長になったのは、風工学会の法人化直後でしたが、移行期に伴う多少の混乱はあったものの、奥田事務局長や中村理事のご尽力や、藤野先生、田村先生、その他の理事のご協力もあり、何とか任期を全うできました。こうして見ると、私は周りから助けられればかりで、ちっとも皆様の役には立てなかったのでは思います。

先日の風工学会年次研究発表会の懇親会の時にも申しあげたとように思いますが、工学とは、社会の声に耳を傾けながら、自然の力や法則を利用して社会に役立つのが目的であり、理学（自然科学）は、自然の声に真摯に耳をすませながら、その中に隠れている存在や法則を引き出し、自然の成り立ちを研究するのが目的であるように思います。私は工学者でありながら、どちらかと言うと理学的なスタンスで研究を進めてきました。私がやってきた研究のうちで、私自身が評価している研究として、風速変動を風圧変動に変換するアドミッタンス Pressure/Velocity Admittance の定式化、陸屋根上の円錐渦と局部負圧の関係、特に大きな局部負圧が生じる条件の明確化、そして高層建築物の不安定振動の実験の3点があげられます。いずれの研究も、私に研究することの喜び、考えることの喜びを与えてくれるものでした。最近、

* 東京電機大学理工学部 客員教授、京都大学 名誉教授
Visiting Professor, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki University
Professor Emeritus, Kyoto University

長方形角柱の不安定振動について、古いデータを引っ張りだすとともに、一から古い論文を読み返してみました。昔は納得したことでも、分からないことだらけでした。

研究はおもしろいものです。若い方は、これからも様々

な分野で研究され、その喜びを味わっていただけたらと思います。

つれづれに勝手なことをつづりましたが、あらためて功績賞，ありがとうございました。